

キリスト教の越境と変容

——長崎・熊本の潜伏キリシタンをたずねて——

黒木雅子

はじめに

規模と速さを別にすれば、ヒト、モノ、カネ、情報の越境は近代以前から見られる。なかでも多くの宗教が、民族、国家といった「境界」を超えて地理的に広がっていった。宗教の越境にはいくつかのパターンがある。地理的に近接地域に広まる場合の他に、教団による地理的に遠い地域への組織的布教、植民地化による宗主国の布教、移民によってもたらされる場合、そして近年ではインターネットによる越境があげられる(井上 2007: 139)。言うまでもなく、越境によって変容するのは、越境する側と受け入れ側の双方である。日本にとってキリスト教は仏教と同じ外来宗教だが、越境のパターンと時期が異なる。キリスト教は航海術の発達によって地理的に離れた日本に渡来し、修道会という組織で布教を行った。一方、仏教はインド、アフガニスタン、中国から地理的に近接地域の日本に伝わった。両者とも越境と時間によって変容し、現在にいたる。

大航海時代のアジアにおいて、キリスト教宣教地の東端にあたる日本で宣教が集中的に行われたのが長崎と天草地方である。2018年7月、これらの地域が潜伏キリシタン関連遺産として世界遺産に登録された。キリスト教が禁じられる中で、日本の伝統的宗教や一般社会と共生しながら信仰を続けた潜伏キリシタンの伝統はどのように始まり、形成、維持、変容したのだろうか。ただし当事者たちをどうとらえるか、外部による規定と自己認識は一致しない場合が多いので、注意が必要である。後述するように、

隠れキリシタンの場合もそうである。

なによりも一神教と言われるキリスト教において、複数の信仰が共存することができないのだろうか。笠原は、日本のキリスト者、特にプロテスタントは神道や仏教が民間信仰と混淆して不純になったと批判するが、キリスト教は当初から混淆宗教であった、と喝破する(1986:28)。イエスの人と精神は、キリスト教独自のものだが、それ以外の教義や儀礼は他の宗教や習俗から取り入れたものが多い(笠原 1986:28)。キリスト教だけでなく宗教の多くは、教義として純粋性を説いているものの、現実を生きた宗教に、そのような例は少ない。兵庫県内にキリシタン遺跡の残るいくつかの寺は、その好例といえる。

本稿では、キリスト教の越境と変容を、潜伏キリシタンの信仰と共同体、宗教的アイデンティティを中心に、2017年～2018年の五島列島と長崎・熊本地域の「潜伏キリシタン」の現地調査を通して考察する。

大航海時代のキリスト教の越境

初期の日本のキリスト教布教は、ポルトガル国王の保護のもとで半世紀にわたってイエズス会が独占したが、その背景には当時の国際情勢が深く関わっている。日本人から見れば「キリスト教」とひとくくりにしがちだが、歴史のなかで宗派の違いによって内部でしばしば軋轢をうんできた。大別すると、ローマ教皇を頂点とするカトリック、そして11世紀に西方カトリック教会と分かれた東方教会、16世紀の宗教改革によって従来のカトリックを批判して分離したプロテスタントの3つがある。日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルは、スペイン生まれのイエズス会という修道会の創設メンバーの一人である。サビエル来日の背景には、ヨーロッパのキリスト教がカトリックと新興勢力のプロテスタントに二分され対立する中でイエズス会が創立され、プロテスタントになった地域の信仰回復と新しく「発見」された地域への意欲的な伝道開始がある⁽¹⁾。

16世紀前半のポルトガル海洋帝国は、インドのゴア、ペルシャのホルムズ、マレーシアのマラッカという港湾都市とその周辺部を結ぶ「点と線の支配」を特徴とするのに対して、スペインは新大陸の広大な領域を植民地として支配した。このポルトガルの海上交易ルートを通してイエズス会の宣教師たちが日本にやってきたのである。大航海時代のポルトガルはイエズス会とともにアフリカ、インド、東南アジア、中国、日本に、そしてスペインはフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティノ会とともに中南米、東南アジアに、貿易と布教を展開した。

その後、日本では1587年の豊臣秀吉の伴天連追放令によって、イエズス会宣教師の滞在は公的には認められなくなった。そのなかで、新たに潜伏して布教に加わったのがフランシスコ会である。秀吉が求めた入貢に対して、フィリピンから外交使節として来日したのが、スペイン系修道会のフランシスコ会の宣教師だった。秀吉の許可を得て上洛し、禁教令施行下で修道院、病院をたてて宣教を開始した。同じカトリックの修道会といってもイエズス会とフランシスコ会は布教方法の違いと対立があり、両者の関係は複雑だった。ローマ皇帝はそれまでイエズス会に限った日本布教を撤回し、すべての修道会に許可したので、1602年以降ドミニコ会、アウグスティノ会が日本の布教を開始することになった。

キリシタン時代

日本における450年余のキリスト教の歴史を3期に分けて、潜伏キリシタンをみていこう(宮崎 2018: 20)。最初の「キリシタン時代」は、1549年のザビエルの来日から最後の日本人宣教師殉教までの約100年間で、この間に信者の数は急速に伸びた。五野井によれば、1592年頃の日本で宣教に従事した宣教師は450人、信者数は217,500という。圧倒的に指導する宣教師が少ないなか、どれだけ一般の信者はキリスト教について理解できたのだろうか、後述する。第二期は、1873年の明治政府による禁教令とり下げま

での約230年間で、一人の指導者もいなくなり信徒だけの「潜伏時代」である。第三期は、明治の禁教令撤廃から現代に至る信仰の自由の時代である。

つぎに用語の確認をしておこう。キリスト教が禁じられていた17～19世紀の日本で、密かにキリスト教由来の信仰を続けていた人々を、一般に「潜伏キリシタン」と呼ばれてきた。世界遺産登録でもこの名称が使われている。しかし厳密に言えば、キリスト教が解禁となった19世紀後半以降もカトリックに戻らず、かつての信仰形態を守っている人々を「カクレキリシタン」と呼び、禁教時の「潜伏キリシタン」や明治以降の「復活キリシタン」と区別する。なぜなら、信仰を隠す必要はない時代に隠れキリシタンと呼ぶのは正確ではないからだ。宮崎は「カクレキリシタン」というカタカナ表記をし、本稿でもこれを採用する(宮崎 2014, 2018)。昭和初期から戦後にかけて、カクレキリシタンは約3万人いたが、集落からの若者の流出によって組織の解散があいつぎ、現在は数箇所しか残っていない(世界遺産長崎チャート 2018: 7)。

ただし、そもそも歴史的に自分たちのことを隠れキリシタンと称した人はいない。自分たちの信仰を人前で口にすることがなかったからである。外部によって使われはじめ、現在では自他とも「隠れ(カクレ)キリシタン」が使われている。地域にもよるが、実際に使われていた言葉は、「あっち」(仏教徒)「こっち(カクレ)」, 「元帳」「古帳」, 「辻の神様」が用いられ、全ての地域に共通する名前はなかったようだ(宮崎 2014: 43)。

日本で最初にキリスト教の拠点となった平戸では、南蛮貿易を行うためサビエルは歓迎されたが、その後キリスト教迫害へと転じたので、ポルトガル船入港は横瀬浦(西海市)に移り、やがて長崎が開港された。南蛮貿易港として開かれた長崎は、キリスト教が最も栄えたところである。一時は秀吉の迫害があったものの、徳川家康がキリスト教に寛容だった頃は、10を超える教会や病院が立ち並び「長崎は日本の小ローマ」と称されたという(世界遺産長崎チャートラスト 2018)。

さらに1600年頃、日本に新たに進出したのはイギリスとオランダというプロテスタントの国である。ポルトガルやスペインと異なり、イギリスとオランダはキリスト教布教とは切り離して貿易を行ったので、幕府は安心して貿易を行った。平戸に建設されたオランダ商館はのちに、幕府によって西暦年号(キリスト紀元)の使用を理由に取り壊された。現在の平戸には、370年余りの時を経て、大航海時代のオランダ建造物が復元されている。

平戸の次に開港した横瀬浦で日本初のキリシタン大名となった大村純忠は、家臣をはじめ仏僧にまでキリシタン改宗を命じ、全領民約6万人をキリシタンにしたといわれている。この時には神社仏閣が壊され、キリシタンが仏教や神道を迫害することもあったようだ。宗教による迫害は、キリスト教だけでなく仏教にもあったのである。

イエズス会神父、アレッサンドロ・ヴァリニャーノの書翰によると、1601年当時30万と推定された信徒に対して、パードレ(宣教師)は25人と少ない⁽²⁾。初期のキリシタン共同体や信仰は、有力な人物、主要なキリシタンや元仏僧などに指導と維持が任された。しかし宣教師が領外に追放されて、指導者がいなくなつてから一般の人々は、どのようにキリシタンの信仰と組織を守り続けていったのだろうか。高山右近のような一部の例外を除けば、キリシタン大名は経済的、政治的な理由で受洗し、領民を改宗させていったので、幕府の禁教政策が出されると棄教し、キリシタン迫害に力を入れた。キリシタン大名の大村純忠、有馬晴信、大友宗麟の息子たちがそうであった。次に指導者がいなくなり信徒だけになった禁教時代、どのような信仰をどのように続けていったのか以下で見よう。

潜伏時代

キリシタン大名の大村純忠が逝去、秀吉の伴天連追放令、家康の禁教令、そして1637年の島原の天草の乱の後、幕府は取締りを強化した。キリスト像を踏ませる「絵踏み」や寺の檀家になることを義務付けた「寺請制度」

などを徹底したことで、長崎中心部からキリシタンは姿を消した。しかし中心部以外の監視の目が行き届かない地域では、神父不在のなかで秘密の組織をつくって信仰を続けるものもいた。長崎の浦上や外海、平戸や生月島、筑後今村(福岡県)、さらに18世紀末に外海から多くが移住した五島列島などに見られる。

潜伏キリシタンが信仰を続ける上で組織は不可欠である。呼び名は地域によって異なるものの、キリシタンの祝日などキリシタン暦を決める「帳方」、洗礼を実施する「水方」、そして信者との連絡を行う「聞役」という三役の下に一般信者がいた。そして、マリア観音や納戸神(納戸などに隠した聖画)などを拝み、オラシヨ(ラテン語の祈り)を唱えた。声を出さず心の中で唱えたり、節がついたり、地域によって異なる。初期の一般信者はロザリオやメダイ(メダル)などの信心道具(信心具)にこだわり、強い愛着をもっていたことが宣教師たちを驚かせたようだ。信心具を信仰の対象としてだけでなく、お守りや厄払いの機能を期待したのである。神仏信仰時の偶像崇拜や迷信を引きずっていた、と解釈する研究者もいる(五野井 2017: 17)。

しかしこのような傾向は初期キリシタンに限ったことではなく、多くの隠れキリシタンに見られる特徴ではないだろうか。一般の庶民が物質的に困窮する生活のなかで「ご利益」的なものを求めるのは、珍しくないだろう。社会変革期(室町政権崩壊と戦国時代)にあつて、人々は物質的、経済的救いだけでなく精神的救いを求めたが、既成の宗教では無力だったのかも知れない。精神的救済とは、今の苦難を生きるための意味付けである(鈴木 2017: 41)。

隠れキリシタンの信仰維持に影響を及ぼしているのが、初期のキリスト教の教育機関である。イエズス会司祭、修道士育成のためのエリート初等教育機関が、セミナリヨ(小神学校)である。かつて安土(現・近江八幡市)と有馬(現・南島原市)にあり、ここで学んだ生徒たちは命をかけて布教に務めた。教皇との謁見を行い8年の歳月をかけて帰国した天正遣欧使節

(1582~1590)の一人、伊藤マンショは有馬のセミナリヨ一期生だった。一方、キリシタンの子どもたちは一種の教会学校に通い、キリスト教の知識のほかに、習字、オラショの暗唱、教理を歌にして覚えた。1583年当時、西日本には約200校あったという(小島 2004 : 74)。

宣教師が一人もいなくなった禁教期に、一部のキリスト教文化の日本化が見られる。なかでも生月島の隠れキリシタンだけに伝わる「歌オラショ」は、グレゴリオ聖歌の一部を思わせるメロディだという(小島 2004 : 80)。イエズス会、特にヴァリニャーノの日本文化を尊重するという方針のもと、単音声のグレゴリオ聖歌を採用したことが、「単調な響き」やメロディに親しみのある日本人に受け入れやすかったのではないかと考えられる(小島 2004 : 76)。また230年の長い禁教時代に、「納戸神」の聖画は破損、修理や転写をするうちに、イエスや聖母子が異国人であることを思わせないほど日本化されたものもある。しかしそれらの原画はキリシタン時代のものであり、日本人になぞられ、模倣されて新しい作品に変容したのである。

しかし、神父不在が長引くと教義が不鮮明になる。さらに寺請制度によって家には仏壇や神棚を祀り、豊作祈願として神官を呼ぶなど、神仏や土着信仰とが並存していた。また葬儀は仏式で行い、お経の効果を消す「経消し」を唱えて、僧侶が帰ると自分たちで再び葬儀を行う地方があれば、仏式とキリスト教両方を行う地方もあった。潜伏キリシタンは、キリシタンの神だけを拜むことは許されず、仏教徒として、また神社の氏子の努めも果たしながら、「先祖伝来のキリシタン信仰」をあわせて行っていたのである。

信仰の自由へ

1853年のペリー来航後、1858年には、米・英・蘭・露・仏と修好通商条約が締結された。最初の開港都市は、函館、横浜、長崎である。しかし禁教令が残っていたので、外国人の在留は居留地に限定され、教会はそのな

かに立てられた。外国人の信教の自由は認められたが日本人には宣教できなかった。開国が近いとみたローマ教皇庁は、日本での再布教をバリ外国宣教会に託した。1864年、長崎に赴任したフランス人神父、ベルナルド・プティジャンは大浦天主堂を完成させる。そして1865年、「信徒発見」という世界宗教史上の「奇跡」がおこった。奇跡とは、天主堂にやってきた浦上の信徒たち12人～15人と、221年ぶりにカトリックの神父が再会したのである。

宮崎は、この奇跡物語には疑問を投げかけ、プティジャンの創作ではないかと述べている(宮崎 2018 : 171)。以下で、宮崎の議論を見ていこう。『プティジャン司教書簡集』によると、再会の時「我らの胸あなたの胸と同じ」と信徒女性が最初に告白したというのが、不自然である。おそらく田舎の一潜伏キリシタン女性なら、緊張して司祭の顔をまともに見ることができなかっただろう。まるで最初から司祭と司祭を待ち望む信の出会いがわかっていたかのような展開である。さらに「サンタマリア御像はどこ」という信徒の言葉にも疑問を呈する。200年余り、潜伏キリシタンは、本物のマリア像を見たことがなく、知っていたのはマリア観音といわれる白磁の仏教の観音像や、和製の民俗的な神仏像のようなものだからである。

はるばる遠くフランスから日本にやってきたプティジャンをはじめ、バリ外国宣教会の司祭たちは、十字を切るしぐさや、ラテン語混じりの呪文のようなオラショを唱え、先祖の位牌と一緒にマリアらしき観音像に手をあわせる潜伏キリシタンの姿を目にして、おそらく落胆したであろう。しかし長崎の街のいたるところにキリシタンの痕跡をみつけた。そこで日本の諸宗教と混ざったキリシタン信仰を真正なカトリック教徒として復活させようとしてのではないかと、宮崎は論じている(宮崎 2018 : 176)。その後、プティジャンは、「浦上四番崩れ」で逮捕された人たちの釈放に奔走した。禁教が解除されると、潜伏キリシタンの復帰や神学生の育成に努め、55歳で亡くなり、信徒が発見された場所の地下に埋葬された。

「浦上四番崩れ」が起こるなか、欧米を歴訪した岩倉具視使節団は、キリ

シタン弾圧が条約改正の障害になっていることを知り、その後の禁教の高札撤去へとつながった。そして1873年、政府の禁教の高札撤去が決定され、1889年の明治憲法で信教の自由が保障された。潜伏からカトリックへの復帰が本格化し、信者は全国で4万人を超え、なかでも九州は全体の6割を占めた(世界遺産長崎チャーチトラスト 2018)。

一方でカトリックに戻らず、これまでと同じように寺社との関係を保ちながら、仏、神道の神、先祖崇拜、カクレキリシタンの神を拜んでいる人たちがカクレキリシタンである。カクレキリシタンは、潜伏時のように組織の三役が指導的役割信仰を行うことで信仰を続けてきた。しかし、近年は後継者不足で、ほとんどの地域でその姿を消している。女人禁制の伝統が強く、これまで男性中心で行われてきた行事の維持が困難になっているのである(宮崎 2014 : 218)。人口減少によって後継者の問題を抱えているのは、カクレキリシタンに限らず、仏教をはじめ多くの日本の伝統宗教においても言えることである。

ではなぜ、信仰を隠す必要がなくなった後も、カトリックに復帰せず、カクレキリシタンになったのだろうか。神父から洗礼を受け直すと、先祖から伝わった宗教を捨てることになるという思いや、死後、先祖と違う場所に行かないように、またはタタリがあるなどの感情からである(長崎巡礼協議会 2010 : 29)。人々の信仰や祈りは、宗派や教義をこえたところにあるのではないだろうか。潜伏しながら維持してきた信仰が、外国人神父のものとは違ふととらえたのかもしれない。1879年に赴任したド・ロ神父のバリ外国宣教会年報によると、外海でカトリックに復帰した信徒は2913人で、カクレキリシタンの方が多く、約5000人であった(長崎巡礼協議会 2010 : 34)⁽³⁾。

現在は多くの組織が解散しており、カクレキリシタンの信者数を数えるのは困難である。なぜなら誰がカクレキリシタンかそうでないかを、明確に線引できないからである(宮崎 2018 : 201)。組織が解散した後も、個人的に年に数回ほどカクレの神様を拝み、長年の習慣として続けている人もいる。以上を念頭において、つぎに筆者が2017年～2018年に訪ねた潜伏キリ

シタンの関連遺産のなかから、長崎の外海地区、天草の崎津集落、長崎県五島列島を見ていこう。

長崎、外海地区

故遠藤周作の『沈黙』の舞台となった外海地区は、長崎中心部から約40キロ南西に位置し、人々が斜面の痩せた狭い段々畑を耕して生活する貧しい地域である。また外海への道は険しく、主な交通は船で「陸の孤島」だったためキリシタンの潜伏を許した。

戦国時代に外海を統治した大村純忠は、領民にキリスト教への入信を命じたのでほとんどがキリシタンだった。一時は5000人近い信者がいたと言われている。その後、キリスト教が禁止され激しい弾圧によって、キリシタンはいなくなったと思われていた。しかし監視の目が行き届かない外海では、生き残ったキリシタンによって信仰が守られていたのである。外海一体の迫害が強まっても、大村城下から遠く、比較的寛容な佐賀鍋島藩の飛び地があったため、多くの潜伏キリシタンが生き延びた。またキリシタンと気付きながらも黙認し檀家として認めていた寺もあった。隠れキリシタンのなかには、信仰の自由が認められてからも寺への恩義や先祖供養のためにキリスト教へは復帰せず、そのまま仏教徒になった人もいたという。

潜伏キリシタンは、表向きは仏教徒を装いながら、家では密かに自分たちの信仰を守り続けた。キリシタンであることを隠すために、寺でお経を聞き、絵踏みに応じたが、そのたびに家に戻り、神の許しを願う「コンチリサン(ポルトガル語で罪を悔いる)の祈り」を唱えた。また氏子となった神社で密かに自らの信仰対象を祀り、オラショを唱え、在来宗教と信仰の場を共有していた。

日本にはキリシタンを祀った神社は3社あり、その一つがこの地区にある枯松神社である。枯松の山頂へ石段の山道を登った林のなかに小さな社がたち、拝殿内に「サン・ジワン枯松神社」の石祠がある。サン・ジワン

とはこの地方で崇敬されている日本人伝道師バスチャンの師といわれている。キリシタンの墓石の上には普段、白い石がバラバラにおいてある。お参りする時、この石を十字架に並べ、終わるとバラバラにして帰るという風習が近年まで受け継がれていた。2010年、第10回「枯松神社祭」では、カトリック教会による祈念ミサ、寺の住職による話、旧キリシタン代表のオラショ奉納が行われた(長崎巡礼協議会 2010)。

1882年、外海地区にド・ロ神父の私財と信徒の労力奉仕によって、出津教会が完成した。神父自身の設計と施工で、風の強い外海の気候を考えて軒先が低く、機能重視がされている。教会堂に入るとステンドグラスがなく、天井も平らで日本の伝統建築を思わせる。また、見過ごしてしまいそうな旧出津救助院の屋根瓦の先に、赤い十字架の装飾が施されていた。社会的に弱い立場にあった女性たちに働く場を与えて、自立させようとして建てた当時の救助院では、パン、マカロニ、などを製造して長崎の外国人居留地に、ソーメン、醤油などは地元向けに販売された。キリシタン弾圧が続くなか28才で来日し、外海の人々に自立できる力を身につけさせようと、生涯を費やしたド・ロ神父の足跡を見ることができる。

天草、崎津集落

天草の崎津は、仏教、神道、キリスト教が共存しながら信仰を育んだ漁村集落である。静かな漁村の崎津集落では、筆者が訪ねたのが8月にもかかわらず、玄関の軒先にしめ縄が飾っている家を何軒も目にした。氏子であることを示すための習慣が今も残っているのである。大漁と海上安全祈願のために建てられた崎津諏訪神社には、潜伏キリシタンが参拝する時は、「あんめんりゆす(アメン・デウス)」を唱えたという記録がある。

また1805年、住民の7割が潜伏キリシタンと発覚した「天草崩れ」で、崎津集落から出された調査によって、当時の人々の信仰が見えてくる。そこには、デウスを漁神として信仰し、朝夕「あんめんりゆす」と唱え、ク

クリスマスには魚肉や動物の肉を備え、墓参りには手を組んで祈りを捧げ、死者に対し「あんめんりゆす」と唱えるなどが記されている。また差し出された信心具のなかには、アワビやタイラギの貝殻内側の模様を聖母マリアに見立てて崇敬した信仰遺物など、身近なものが信心具として代用された。このように信仰が生業と密接に関係していることがわかる。

キリスト教解禁後の1888年に建てられた教会の跡地は現在、修道院になり、1934年に新しく崎津教会が建てられた。再建された崎津教会の土地は、司祭として着任したハルブ神父の強い希望で、弾圧の象徴である絵踏みが行われた庄屋役宅跡が選ばれた。禁教時代に厳しい絵踏みが行われた場所に、現在の祭壇が配置されたのである。教会建築に献身した神父は81歳で亡くなり、旧崎津教会跡近くの墓地に眠る。ゴシック形式の崎津教会は「海の天主堂」と呼ばれ、礼拝が行われる内部は、国内でも数少ない畳敷きである。

長崎の五島列島

五島列島は、外海地区の対岸、長崎県本土から西へ約50～100キロ離れた海上に位置する大小あわせると約140の島々である。古くは日本と大陸を結ぶ海上交通の要所として遣唐使船の国内最終寄港地でもあった。ここはさまざまな宗教文化が共存する島で、多くの神社仏閣や遣唐使・空海にまつわる信仰が残っている。16世紀初めにはあったという五島神楽のなかの「上五島三十番」の一部を、政彦神社で鑑賞した。それは、畳一間の広さしかない舞板を舞台として、太鼓、笛のリズムに合わせて、躍動的で力強い舞や表情豊かでユーモラスな面舞など、特色ある舞神楽である。

また近世においては、異国船取り締まり最前線として歴史的には大きな役割を果たした。この島にキリスト教が伝播したのは、16世紀中葉、この地を支配していた宇久氏(のちの五島氏)がポルトガル人医師でイエズス会士のアルメイダを招致したことに始まる。19代藩主はキリシタン大名とな

り、家臣をはじめ多くの人々が洗礼を受けた。1606年には2000人以上いた信者は、キリシタンへの迫害が始まると多くが棄教するか潜伏キリシタンとなった。

その後、潜伏キリシタンの歴史が始まるのは、18世紀末である。五島藩から大村藩に開拓移民の要請を行ったことによって、貧しさに耐えかねていた外海のキリシタンは命がけで小さな船で新天地へ渡った。また移住の背景には、当時大村藩では間引きの強制があったので、それを避けるという事情もあった。数回に渡る移住者の累計は3000人余りで、そのほとんどが外海からの潜伏キリシタンだった。しかし憧れの土地だった五島に行くと、実際に肥えた農地はすでに人が住み、移住者には瘦せた土地しかなかった。「五島は極楽、行ってみて地獄」という厳しい現実のなかで土地を開拓した。かつては五島列島全体で80ヶ所のキリシタン集落があったという(林 2018)。

明治6年禁制の制令が取り払われると、五島列島でも多くがカトリックに復帰し、集落の中に教会堂が建設された。信徒たちによって財産と労力を惜しまず建てられてものである。現在、五島列島には40数棟の教会堂があり、その多くが山の中腹斜面や不便な入江の奥にある。移住者が開拓できたのはそのような厳しい条件の土地しかなかったからである。五島の隠れキリシタンは外海から移住してきた経緯から、信仰対象をはじめオラショや行事などに共通するところがある。また五島でみつかったマリア観音のなかには、信者が外海から持っていったものもある。

むすびにかえて

2018年、世界遺産に登録された長崎県の外海地区、五島列島、天草の崎津集落を中心に、潜伏キリシタンの信仰と共同体、宗教的アイデンティティの変容とその社会的背景について見てきた。キリスト教に限らず、あらゆる文化が越境し異文化に受け入れられるには必ず変容が伴う。イエズス会

が越境して日本で宣教する際に、その方針は適応主義に変わった。特にヴァリニャーノは、従来のヨーロッパ中心的で植民地主義的な宣教方針を改めて、布教先の文化尊重を行った(川村 2004: 22)。

受け入れ側のキリスト教は、初期のキリシタン時代、指導者のいない禁教期、禁教令の廃止後と、時とともに変わっていった。最初のキリシタン時代の大多数の民衆はキリシタン大名の改宗政策に従ったので、一神教としてのキリスト教の教えを十分には理解できていなかっただろう。信徒だけになった潜伏時代は、神様と仏様とカクレの神様を拝んだが、その根底に祖先崇拝があった。たとえば、オラシヨの源流はカトリックだが、長年の間に変容し、唱えるだけで信徒の間でも意味がわからなくなっているものもあれば、歌オラシヨのように聖歌の痕跡が見られるものもある。いずれも、先祖伝来のものとして大切に伝えられてきたのである。そして禁教令廃止後は復活キリシタンとカクレキリシタンに分かれたが、後者の組織は多くが解散し信徒数は減っている。

キリスト教は教義的には一神教だが、潜伏キリシタンは重層信仰である。したがって潜伏キリシタンの信仰の中核にあるのは、キリスト教要素ではなく、日本の民衆宗教にあるタタリ観と先祖に対する篤い信心である(宮崎 2014 2018)。では日本化した潜伏キリシタン、カクレキリシタンは「本当の」キリスト教徒ではないのだろうか。そこで問題となるのが、ときおり出会う西洋中心的なキリスト教理解である。つまり、西洋のキリスト教だけが正統(本当)のあるべき姿というイメージが強いように思われる。たとえば、金髪で碧目のイエスのイメージに違和感はないだろうか。もちろんカトリックには世界に広がる教会が共有する普遍的な教義や典礼(儀式)はある。しかし、アフリカ諸国や中南米諸国、韓国など、それぞれ独自の歴史的・宗教的伝統や慣習と結びつきながら土着化してきた。土着化に変容は不可欠である。

外来宗教の仏教は神道と習合することで、日本に定着した。同じようにキリスト教が仏教や神道などと習合すると、もはや「本当の」キリスト教

ではないという考え方が、日本でキリスト教人口が増えない(人口の1%以下)原因ではないか、と宮崎は論じている(宮崎 2014: 208)。キリスト教人口が増えない原因はともかく、キリスト教徒のなかでも複数の宗教的影響を自覚したり、表明する人は少なくない。

筆者は1990年代に、日系アメリカ人のキリスト教女性(プロテスタント)たちにインタビュー調査を行った(黒木 1999)。そのなかの一人(40代の3世)は、仏教徒の家庭に育ち、その後キリスト教牧師になった。彼女にとって、両者の影響を相互排他的に区別するのは難しいとして、「ブディスト・クリスチャン」⁽⁴⁾という複合的な宗教アイデンティティを語った。そこには、他者による規定と自己認識の間にあるギャップとその葛藤がみられた。

多くの潜伏キリシタンはそれを口にはせずに生きてきた。当時の人々の自己認識や葛藤は、限られた資料からしか推測できない。しかし、禁教令取り下げ後のカクレキリシタンは、宮崎の調査で明らかになっている。それによると、キリシタンであることを隠すという意識は薄れ、あるいは隠しているわけではなく、先祖代々誰にも見せないというやり方を、守ってきただけなのである。

カクレキリシタンにとって重要なのは、信仰が「本物」のキリスト教かどうかやその教義ではなく、先祖が大事にしてきたものを持ち続けて現実を生きることではないだろうか。宗教の根源にあるものは、教義の純粹性、儀式的荘厳さや組織の堅固さではなく、人々の内にある信ずる心である(笠原 1986: 31)。その信仰や信心においても、必ずしも揺るぎのない、強いものとはかぎらない。むしろ揺れ、疑い、忘れそうになるなど、変容しながらも持続してきたのが、現実を生きた人々の信仰であろう(笠原 1986: 31)。潜伏キリシタンの関連遺産には、重層的な信仰とアイデンティティ変容によって、いかに人々が当時の社会的制約のなかで葛藤を生き延びたかが語られている。

参考文献

- 笠原芳光, 1986, 『宗教再考』 教文館。
- 五野井隆史, 2017, 『キリシタン信仰史の研究』 吉川弘文館。
- González, L. Justo, 1984, *The Story of Christianity, volumen 1: The Early Church to the Dawn of the Reformation*, San Francisco: Harper (=2002 石田学訳『フスト・ゴンサレス キリスト教史 上巻——初代教会から宗教改革の夜明けまで』 新教出版社)。
- 箒木蓬生, 2017, 『守教 上下』 新潮社。
- 林一馬, 2018, 「五島列島のキリスト教略史と教会群」 坂井恵子編『祈りの島五島列島』 イーズワークス。
- 井上順孝, 2007, 『宗教社会学がよくわかる本』 秀和システム。
- 川村信三, 2004, 「ヴァリニャーノの時代」 太田淑子編『日本, キリスト教との邂逅——二つの時代にみる受容と葛藤』 オリエンズ宗教研究所。
- 小島幸枝, 2004, 「キリシタン教会と音楽・演劇・絵画」 太田淑子編『日本, キリスト教との邂逅——二つの時代にみる受容と葛藤』 オリエンズ宗教研究所。
- 黒木雅子, 1999, 「日系アメリカ女性の自己再定義——エスニシティ・ジェンダー・宗教の交錯」『社会学評論』vol. 50. no. 1。
- 宮崎賢太郎, 2014 『カクレキリシタンの実像——日本人のキリスト教理解と受容』 吉川弘文館。
- , 2018, 『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』 角川書店。
- 長崎巡礼協議会, 2010, 『外海のキリシタンとド・ロ神父』 長崎巡礼協議会。
- 世界遺産長崎チャーチトラスト, 2018, 『大浦天主堂物語』 世界遺産長崎チャーチトラスト。
- 鈴木範久, 2017, 『日本キリスト教史——年表で読む』 教文館。
- 若松英輔, 2015, 『イエス伝』 中央公論社。

注

- (1) 当時のポルトガルは、最終的には東洋全体を獲得しようとしていた。しかしヴァスコ・ダ・ガマによって明らかになったのは、広大な土地と人口のインド、中国、日本の征服は不可能だということで、絹や香辛料の交易を進める政策をとった(González 1984=2002: 430)。
- (2) ヴァリニャーノは「天正遣欧使節(1582~1590)」の立案者であり、日本布教の最高責任者であった。この使節団の帰国によって活版印刷機が日本にもたらされ、キリシタン版の出版が可能になり布教を推進した。彼はヨーロッパの文化を押し付けるのではなく、日本文化を尊重する方針でセミナリヨを創立した。

- (3) 1879年に外海地区の司祭として赴任したフランス人のマルコ・マリ・ド・ロ神父は、貧しい生活をする人々が自立する力をつけるために、私財を投じて孤児院、女子救助院(海難や病気で働き手を失った女性などを対象)、診療所などを開設し、社会福祉事業に生涯を捧げた。28歳で来日して以来一度も故郷に帰らず、74歳で亡くなって、出津共同墓地に葬られている。
- (4) Buddhist-Christian Studies という言葉は、1981年から出版されている学術雑誌(ハワイ大学出版局)に見られる。